

『サル化する世界』

2020年03月09日

神戸女学院大学名誉教授の思想家 内田樹氏が『サル化する世界』を上梓している。ポピュリズムという言葉の定義ははっきりしていないが、内田氏は「今さえよければ、自分さえよければ、それでいい」とする考えで、平たく言えば、目の前の多い餌を欲しが「サル化」と言う。「倫理」の「倫」の原義は「なかま・ともがら」で、「倫理」とは「他者と共に生きるための理法」のことである。「サル」の対義語が「倫理」で、現代を多角的に分析、批判し、サル化から人間化への道筋を示そうとしている。多岐に亘るので、興味深く感じた論点だけを紹介し、私の感想を書きたい。

日韓関係が悪化し、嫌韓論調が広がっている。一方、嫌中論調は抑制されている。なぜなのか。中国が一党独裁の下で飛躍的に躍進し、AI軍拡競争において、米国に先んじているのではないかと、米国は中国を恐れている。米国の「中国恐怖」が日本の政官財に浸透し、対中国の論調が一変した。韓国では、市民たちが自力で軍事政権を倒し、民主化を達成し、経済成長を収め、文化的発信力を高めた。中国は強権政治によって、米国と覇権を争うまでにのし上がった。中国を羨む人たちは「改憲」という「非民主化」による強権政治で、劇的成功を本気で信じている。日本の指導層が抱いている「日本も中国化することが望ましい」という考えに国民は無意識に同意し始めている。だから、民主化と市場経済を組み合わせた韓国の「成功」に同調しない。安倍政権下で押し進めている独裁化を説明できる分析ではないか。内田氏は独裁化に反論する。民主主義は国難的危機の時、強い復元力を持っている。民主主義は単なる多数決ではなく、多様な立場を合意形成に組み込むことで、集団の復元力を担保する仕組みである。今、この民主主義が危機にあると。

「真実」を軽んじる人たちがいることには驚かないが、驚くべきは、そのような人たちが世界各地で、同時多発的に、政治的指導者やオピニオンリーダーになり、彼らが国民に支持されていることである。米国、ロシア、中国では、「真実」に対してシニカルで懐疑的であることが知的であり、反対派との合意形成には時間を割かず、味方の頭数を集めて、一気に決めることが「当世風」ということが起きている。内田氏の現実認識は的を射ているのではないか。「真実」とまでは至らなくても、過去の政策の成否を精査し、集団的な合意を形成してから、これからの政策を起案するという意思決定プロセスが、生存戦略上重要であったはずである。そのためには、正か誤か、敵か味方か、AかBかという二者択一の選択で、政治文化を痩せ細らせるのではなく、苦しいけれども、理解も共感も絶した他者たちとの「気まずい共存」を受け入れ、彼らを含めた公共的な政治空間を形成していく。気長で、忍耐強い行程の中から民主主義は醸成されていくと語る。

白木聡氏は『永続敗戦論』で、日本は異常な仕方では敗戦を否認してきたと論述している。内田氏は、その通りだと思うが、世界の敗戦国も、それぞれ固有の仕方では自国の敗戦を否認していると言う。諸外国の敗戦後のあり方を報告している。ドイツはナチスの軍事独裁の経験から、国際社会に認知される民主主義を構築してきたが、基本的には、国民もナチスの被害者であり、敗戦によってナチスの軛から解放されたという物語を作っている。

小津安二郎の映画『秋刀魚の味』の中で、駆逐艦の元艦長だった笠智衆と乗組員だった加藤大介の会話がある。加藤が、「ねえ、艦長、もしあの戦争に勝っていたらどうなったんでしょうね」と問うと、笠が、静かに笑いながら「負けてよかったじゃないか」と答える。すると、加藤は「え？」と怪訝な顔をするが、得心したらしく「そうかもしれねえな。ば

かなやつが威張らなくなっただけでもね」と頷く。内田氏の父親も戦争に行ったが、戦争のことはしゃべらなかつた。その父が二、三度、同僚に「負けてよかったじゃないか」と呟くのを見たことがあった。内田氏は、戦中派の実感だと思うが、彼らの思いがしっかりした思想として、次の世代に継承されることはないと言う。

内田氏は、自分は「愛国者」だから、歴史修正主義に非常に批判的になると語っている。歴史修正主義者たちは、「南京虐殺はなかった」、「慰安婦制度に国は関与していない」とか言い訳がましいことを言う。国民にとって都合の悪い話も、体面の悪い話も織り込んで、清濁併せ呑んだ「タフな物語」を立ち上げる。国が犯した戦争犯罪、戦略上の判断ミス、軍人たちの非道な略奪、放火、強姦、殺人があった。この事実を認めた上で、なぜそんなことが起きたかを解明する。本当にあった出来事を「不都合、体面が悪い」からと言って、隠蔽し、否認すれば、やがて、毒が全身に回り、共同体の「壊死」が始まる。

内田氏は、カウンターカルチャーを持つ米国の「文化的復元力」を高く評価している。カウンターカルチャーとは、反体制、反権力的な文化表現である。ベトナム反戦を主張し、米国政府の非道をなじり、激しく抵抗する人々がいた。ベトナム帰還兵が心を病み、無差別に人を殺す映画が多く作られた。大統領やCIA長官の犯罪を題材にした映画も珍しくない。自国をこのように批判的に描くことを許容する国は多くない。「無謬の統治者」などはない。統治者の失策に対し、異議申し立てができる文化には復元力がある。「美しい日本」などと、空疎な言葉を吐き散らし、歴史を改竄していると、薄っぺらでひ弱なものになる。内田氏は、視野狭窄的な人間が現実の変化に対応できないように、集団の場合も同じで、カウンターカルチャーをも容認し、受け入れる「タフな精神文化」を持つ必要があると言う。私は、トランプ政権の多様性を拒否する内向きな政策を危惧し、麻生副総理の「2000年の長きにわたって、一つの国で、一つの場所で、一つの言葉で、一つの民族、一つの天皇という王朝が続いている」という言葉を聞いて、世界の孤児になると恐れる。

深みがあって感服させられる老人は少なく、外見は老人で中身はガキという「老いた幼児」が多くなった。戦後70年かけて「幼児的な老人」が作り込まれ、増えて来た。戦後は「対米従属を通じて対米自立」を目指す国家目標があった。この国家目標は成熟した個人を目指すのではなく、同質性の高いマス形成することによって達成されると信じてきた。効率性がよく、組織管理もしやすく、消費行動も画一的だから、大量生産、大量流通、大量消費というビジネスモデルを形成してきた。この同質性の高い集団は「この道しかない」と行動し、一方向には強力に働くが、前代未聞の状況が来ると対応できない。多様性の豊かな国民を育成することに関心を持たなかつたツケである。経済力によって、米国と対等になり、「金で国家主権を買い戻す」という暗黙の国民的な合意があったが、バブル崩壊によって、国家プランは崩壊し、一気に自信を失った。日本には、有形無形の文化的遺産があり、それらから学び、生かしながら共生の基盤を作れるのではないかと期待する。

内田氏は下記のように語っている。「悲観的にならない。怒らない。恨まない。そういうネガティブな心の動きはすべて判断力を狂わせます。危機的状況下では判断力の正確さが命です。にこにこ機嫌よくしていないと危機は生き延びられません。眉根に皺寄せて、世を呪ったり、人の悪口を言ったりしながら下した決断はすべて間違えます。不機嫌なとき、悲しいとき、怒っているときには絶対に重大な決断を下していけない。これは先賢の大切な教えです。」「喜びとユーモアを忘れるな！」ということであろう。